戒驕慢

沒入其家、方將毀祠堂、威靈忽見、無敢近者云、

〔本朝文粹十二〕座左銘并序　前中書王○兼明、中略、

貧而莫下志、富而莫驕人、

〔十訓抄三〕可離憍慢事

或人いはく、世にある皆憍慢を先として、よく穩便なるは少し、あるひは自由の方にてをだやかならず、是我涯分をはからず、さしもなき身をたかくおもひあげて、主をかろんじ、傍輩をもさくる、或は偏執の方にてかたくな也、是は我思ひたる事をいみじくして、人のいふ事を用ざるなり、あるひは世にかはれるふるまひあり、是はむかしをのみいみじとおもひて、今の世にしたがはぬなり、或は折節に又嗚呼あり、是は内によくなれにしかばとおもひて、晴に出て人をならし、もしはうちとけ遊所にさし入て、我いまだみだれぬまゝに、ことうるはしくひもさしかためて、人をしらかし、其座をさますなり、あるひは才能に付てそしり有、これは物を知、才のあつきによりて、よろづの人をあなづるなり、あるひは愛著についてをろかなり、是は我主より外、めでたき人なし、我妻子ばかりこゝろばせたらひたるものは、あらじとおもふなり、或はすきに付て咲らるる事もあり、是はむかしの人はことに心もすきて花月いたづらに過さゞりけり、今は時代あらたまりて、おもしろき事もさるほどにて、それにしみかへりては、など心一やりて、人めにあまる也、あるひはふるまひに付てぐせあり、これは立居の有さまの名たゞしく、おこがましきなり、大かたかやうの事は、憍慢をもとゝして、心の少きよりおこれる、これによりて、つねに生涯をうしなひ、後悔をふかくす、かゝれば假の身を吉と安じ、昔をいみじとしのび、物をおもしろしとおもふとも、人目をばはかりて、よく習をつゝしみて、心に心をまかすまじき也、されば、ある經には、心の師とは成とも心を師とせざれと、かゝれたるとかや、およそ貧きものゝ諂はざるはあれども、